

既製衣料に関する中学生の意識について(第1報)

—衣料品の寸法基準について—

日本大短大 ○大村知子 市立沼津2中 稲葉和子

目的 年々、わが国での既製衣料品の普及は著しく、その品質や寸法基準・表示法等も改善されつつある。通産省では、昭和53年度から「既製衣料の寸法基準作成のための体格調査」を実施中で、すでに0~18才までの調査は終り解析がはじめられている。今後、これらの資料や新しいサイズシステム・寸法基準について、消費者側も正しく理解し、充分活用してゆくことが望ましい。

そこで、少年少女用衣料の寸法基準のあり方や正しい普及などを技術・家庭科等学校教育の中で消費者教育をとり入れてゆく際の参考資料を得る目的で、消費者としての男女中学生の衣料サイズ等に関する意識について調査し検討を試みた。

方法 衣料サイズに関連する21項目について、沼津市内の公立中学校2校に在籍する1~3年までの男女中学生1128名を対象に、アンケート形式での調査を1979年10月~1980年1月に実施した。その中から本報では、寸法基準と表示に関係が深いと思われる9項目を検討した。

結果 中学生が既製衣料品を購入する時、選択基準とするのは、サイズを主としている。だが、約半数はサイズに関する不満を感じている。表示方法についての認識は、学年が進むにつれ高くなるが、それらの知識は家族から得る者が多く、技術・家庭科の授業から学んでいる者は女子にわずかみられる程度である。また自分の身体寸法のチェック法として、男子は身体検査、女子は家庭科の実習の時知ることが多い。自分の身体寸法については、男女共、身長・足長は知っている者が多いが、衣服寸法に関係が深い部位については、男女差が顕著であった。